

薩摩藩における蘭学受容とその変遷

田村省三

The Acceptance of Rangaku and Changes in the Satsuma Fudal Domain

- ① 集成館事業と近代化の背景
- ② 「蘭癖」から「蘭学」へ
- ③ 斉彬を育んだ蘭学者たち
- ④ 実用の学問の重視
- ⑤ 技術者たちの蘭学受容
- ⑥ 種痘普及の事例
- ⑦ 開成所における蘭学と英学
- ⑧ ウィリスの招聘と近代医学の普及
おわりに

【論文要旨】

本稿は、日本の近代化の先駆けであり、薩摩藩の近代科学技術の導入とその実践の場であった「集成館事業」の背景としての視点から、薩摩藩の蘭学受容の実際とその変遷について考察したものである。

薩摩藩の蘭学は、近世における博物学への関心と島津重豪の蘭学趣味から出発し、オランダ通詞の招聘や蘭方医の採用をとおして、しだいに領内に普及していった。そして、蘭学が重用され急速に普及していったのは島津斉彬の時代であり、藩が強力で推進した「集成館事業」の周辺に顕著であった。しかし、藩士たちの蘭学の修得については、中央から遠く離れた地域性や経済的な困難もあって、江戸や大阪への遊学は他の地域に比べて少なかった。むしろ、中央の優秀な蘭学者を藩士に採用したり、蘭学者たちとの人脈を活用するという傾向が強かったと思われる。ただし長崎への遊学は、例外であった。

薩摩藩の蘭学普及は、藩主導で推進されている。したがって地域蘭学の立場からすれば、同時代の諸藩とはその目的、内容と規模、普及の事情に相違がみられる。一方で、蘭学普及の余慶がまったく領内の諸地域には及んでいなかったのかと言えばそうではない。このたび、地域蘭学の存在を肯定することのできる種痘の事例を確認することができた。それは、長崎でモーニッケから種痘の指導を受けた前田杏齋の種痘術が、領内の高岡や種子島の医師たちに伝えられ実施されたという記録によってである。また薩摩藩は薩英戦争の直後、藩の近代化を加速するため、洋学の修得を目的とした「開成所」を設置する。ここでは当初蘭学の学習が重んじられていたが、しだいに英学の重要性が増していった。さらに明治二年、国の独医学採用に伴い、藩が英医ウィリアム・ウィリスを招聘して病院と医学校を設置してから、英国流の医学が急速に普及する。この地域が本格的に西洋医学の恩恵を受けるのは、以降のことである。

① 集成館事業と近代化の背景

薩摩藩が急速に近代化への動きをみせるのは、英明の誉れが高かった島津斉彬が嘉永四年（一八五二）藩主になってからである。斉彬が多く蘭学者たちと交流していたことはよく知られているが、その成果としての集成館事業は、当時鹿児島を訪れた西洋人たちにもその近代化のスケールの大きさに大きな感動をあたえた。

安政五年（一八五八）の三月と五月の二度にわたり、勝海舟に伴われて鹿児島湾に一隻の西洋船が入港する。船名をヤーパン号と言い、のちに咸臨丸と名づけられた。この船で鹿児島へやってきたオランダ海軍の軍医ボンペや一等尉官カッテンディーケは、日本滞在中の詳細な日記をつけているが、鹿児島的印象について驚きをもって記している部分がある^①。それは、鹿児島島の磯で行われていた西洋式近代産業移入の事業である。

例えばボンペは、ここに建設された諸工業はフルに稼働していたとし、高炉のある溶鉱炉や大砲製造場、広大な鉄工所、鉄板製造場、磁器や陶器、それにガラスを造るための工場の様子を記録している。またこの工場群には、千二百人もの人々が働いていたという。さらにこれらの事業を踏まえ、薩摩藩は間もなく日本全国の中でもっとも繁栄し、もっとも強力な藩になるであろうと予言した。

磯に設置された工場群は、集成館と名付けられた。この集成館を中心とした近代産業移入の事業は「集成館事業」と呼ばれる。その指導者は島津斉彬であり、事業の着手は斉彬の藩主就任と同時になされた。

本来国家的政策として進められるべきこのような事業を、なぜ幕末の薩摩藩において成し遂げなければならなかったのか。幕府の統治体制の弱体化もあったが、薩摩藩の特殊な事情もあった。

俗に七十七万石という薩摩藩の石高のうち、十二万石余りは琉球王国の石高である。江戸時代初期から薩摩藩は琉球王国を領土的に支配していたから、治めるべき領地の形は長大で、しかもその大半が海であった。今日でも鹿児島県は南北に六百キロもあるが、沖縄県まで含めれば南北千二百キロという、日本のどこにもない特殊な形をしている。しかも当時の欧米列強の黒船は琉球弧づたいに北上してくる。したがって、薩摩藩は他藩に先駆けて海の備えをしなければならなかったのである。

幕末の欧米の動きにもそれぞれの事情がある。例えば当時日本の近海にはアメリカの捕鯨船が頻繁に姿を見せていた。彼らは鯨を食用とすることなく鯨油を得ることを目的として出漁していた。特に抹香鯨の油は潤滑油や灯油として、高い商品価値を持っていたという。アメリカは、十八世紀初めには沿岸捕鯨から公海捕鯨へと転じ、やがて南米のホーン岬を経て太平洋に入り、北太平洋が漁場となるころには、その自然条件の厳しさからくる安全な寄港地の確保と、鯨油を採取する際に必要な燃料や食料の補給基地として日本に注目するようになった。

またアメリカは、一八四六年から一八四八年のメキシコ戦争後、ニューメキシコ、アリゾナ、カリフォルニアを含めた北米大陸の南西部を手に入れている。さらにはメキシコ戦争終結の年、カリフォルニアで金鉱が発見されたことにより、合衆国の東部と西部の交通が盛んになると、アメリカ・中国間の太平洋航路が現実の問題となってきた。そして日本はその中継地点としても新しい意味を持つようになってきたのである。

さらに、日本を太平洋における物資の重要な補給基地として望んでいたのはアメリカだけではなかった。十八世紀の末から日本には多くの異国船がさまざまな目的をもって来航してきたが、明確な目的をもって最初に通商を求めてきたのはロシアであった。

当時、ロシアの重要な輸出品に毛皮があり、これによって相当な外貨

を獲得していたが、ロシア人はその獸毛を得るためにシベリアに進出し、やがてその範囲はアリューシャン列島沿いに、アラスカからアメリカ北西岸にまで拡大していった。そこで、日本を開国させここに新しい拠点を作ることは、ロシアにとっても北太平洋における覇権の確立を意味するものであった。

また、産業革命によって欧米の資本主義経済は急速に進展し、それに伴って新しい市場の獲得が各国の最大の関心事となっていた。このような状況下で、日本も鎖国政策の上に太平の眠りを貪り続けるわけにはいかない。イギリスは十八世紀末からの自由貿易の発展によって、さらに市場の拡張を図り、イギリス艦船の薩摩藩領内への寄港に限っても、寛政九年（一七九七）の測量船プロヴィデンス号の那覇来航以来、頻繁に回を重ねるようになっていく。同様にフランスも、極東への進出を望んでいた。このように斉彬の時代の、日本及び日本近海は、欧米先進諸国の利害が微妙に衝突する場所になってきていたのである。

すなわち、島津斉彬の集成館事業の目的は、薩摩藩一国においても黒船の砲艦外交に対抗し得る海軍力を整備し、ひいては諸外国と対等に交流することのできる豊かな国づくりにあった。

斉彬の集成館事業では、ありとあらゆる実験と試行錯誤が繰り返され、見込みのついたものから事業化されていった。造船事業と大砲の製造を主目的とした製鉄事業。船が帆走するための帆布の製造を中心とする紡績事業。あるいは、蒸気船の建造。その結果、日本初の本格的な西洋式軍艦昇平丸、蒸気船雲行丸が完工する。そのほか、電気分解法による和欧文鉛活字の製作、写真技術の修得、地雷・水雷の製造、ガス灯の実用化、電信の実験などがある。集成館では、明治時代以後の日本の産業の基幹となった造船・製鉄・紡績の三産業はもちろんのこと、映像や通信、メディアに関する初期段階のさまざまな事業が推進されていたのである。

斉彬の危惧していたことが、彼の死後の文久三年（一八六三）七月、

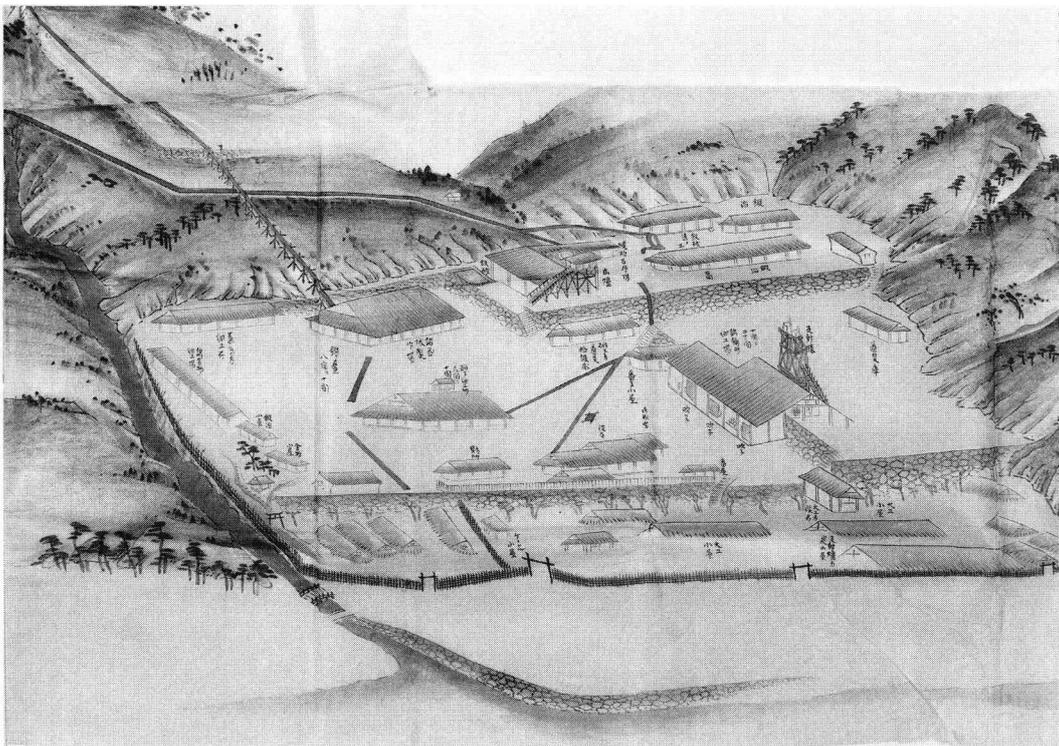


写真1 斉彬時代の集成館（武雄鍋島家資料「薩州鹿児島見取絵図」武雄市蔵より）

しかもイギリス艦隊の鹿兒島湾入港、砲撃という形で起った。島津久光の行列を乱したとして薩摩藩士が英国人を殺傷した生麦事件を契機に起った薩英戦争である。この時集成館も砲撃を受け、あたかも彼の夢は灰燼に帰してしまっただかのようなのであった。

しかし、この戦争は薩摩藩に非常な刺激をあたえ西洋の文明の優秀さを痛感させることになった。斉彬のあとを継いだ島津忠義は、文久三年十月、ただちに集成館の再興に着手している。

またイギリスとの間に生麦事件、薩英戦争の和議が成立すると、その長所を吸収するために急速にイギリスに接近するようになっていった。慶応元年には、欧米諸国の文明をとり入れ藩の近代化をはかるために、申木野の羽島からひそかに十九名の使節と留学生をイギリスに派遣し、五代友厚らには、紡績機械の購入と技師の招聘を命じ、慶応二年には諸機械と技師たちが到着。翌三年には磯の地に日本最初の近代的紡績工場が操業をはじめた。そしてこのような事業の推進者として蘭学者たちの集団があった。

②「蘭癖」から「蘭学」へ

島津斉彬が西欧の進んだ科学技術を採用して集成館事業を推進することができたのは、まず多くの優秀な蘭学者たちと交流しながら蘭書を翻訳させ、その知識を吸収する努力を怠らなかつたことにある。また担当の技術者たちに絶えず実験を繰り返させ、失敗を恐れず常に励ましながら、ついには実用化に成功したものが多し。彼等は、藩主在任中江戸にいくことも多かつた斉彬とこまめに連絡をとりつつ、指示を仰ぎながら諸事業を誠実に実地に移していった。その信頼関係は、極めて強かつた。そもそも斉彬が西洋の文物に興味を持つようになったのは、曾祖父島津重豪の影響を強く受けたからであつた。重豪は「蘭癖」と言われるほ

ど、生涯を通じて西洋の文化を学び続け、自身もアルファベットを書き記した。また晩年に近い文政九年（一八二六）二月、オランダ商館付きの医師シーボルトの江戸参府を実子の前中津藩主奥平昌高や曾孫の斉彬と共に大森（現東京都大田区）に出迎えた時、八十二歳の重豪が時々オランダ語をまじえて質問したとシーボルトは記録している²⁾。

もともと日本における西洋文化の受容は、主にポルトガル語やスペイン語を介しておこなわれていたが、江戸時代になって鎖国令が発効され、西洋との接点がオランダ一国に限られるようになると、その役割をオランダ語がとって代わつた。そして、十八世紀の初頭には長崎のオランダ通詞の語学力も徐々に進み、なかには医学・薬学・植物学・化学・物理学など、西洋の専門的知識を身に付けた人々が現れてくる。

また、飢饉に備えてサツマ芋の栽培が有効であると論じた青木昆陽は、その著書『蕃薯考』で將軍徳川吉宗に認められて幕府に召し出され、その翌年の元文五年（一七四〇）には御目見得医師野呂元文と共にオランダ語の学習を命じられた。

昆陽たちのオランダ語の習得は、江戸に参府してくるオランダ人からオランダ通詞をとおして教授された。このころは毎年のオランダ商館長の江戸参府が恒例で、薩摩藩江戸屋敷の宝暦四年（一七五四）から明和七年（一七七〇）の日記（『中興日記』）によれば、重豪が十一歳で薩摩藩主となる宝暦五年七月の直前、三月二十四日にオランダ人の通行を見物したとある。翌六年三月十一日にも、重豪はまたオランダ人の江戸出立を見物しており、以降オランダ絵鏡、びいどろ花生、オランダ砂糖漬、オランダふらすこ、オランダ人の書いた字、オランダ人献上の菓子といった珍品が日記に散見されるようになる。

さらに吉宗が、漢籍に限られるものの西洋学術書の輸入を認めたことは、西洋の実学への認識を新たに喚起して、例えば農業技術の改良を促進し、あるいはオランダの文物が流通することによる文化的な刺激が、

新しい産業の萌芽にもつながっていった。

また医学の分野に目を止めれば、安永三年（一七七四）に『解体新書』を訳して刊行した前野良沢は、青木昆陽にオランダ語を学び、長崎に出てこれを深めた。そして伝統的な医学の知識に西洋医学という新しい血を注いで、前野や杉田玄白らはこの学問を「蘭学」と称するようになる。

明和八年、このような時代的雰囲気背景にして、前野良沢らが江戸千住の刑場小塚原で蘭語訳の解剖学書『ターヘル・アナトミア』を見ながら遺体を解剖し、記述内容の正確さに驚いて和訳を決意した。この時、二十七歳になっていた重豪もオランダの文化に直接触れるべく、江戸から薩摩への帰国の途中長崎に立ち寄っていた。

幕府への長崎立ち寄りの理由は、薩摩藩が異国船通行の入り口にあつて特別な任務を負い、長崎に異変のある時には警護を命じられることにもなるので、あらかじめ長崎の実情を把握しておきたいということであつた。

重豪は、七月十六日から八月九日の二十三日間長崎に滞在し、この間オランダ商館やオランダ船ブルグ号を訪問したほか、オランダ大通詞今村源右衛門の屋敷にオランダ人を招いたりした。

今村源右衛門はこの年の年番通詞であり、妻は薩摩藩の御用商人服部政太郎の養女（実父は政太郎の弟川畑甚六）で、子の今村政十郎は重豪の長崎訪問に先立って同年四月から薩摩藩に仕えている。また重豪は、オランダ商館長ティツイングの紹介でオランダ通詞であつた松村元綱を、安永九年ごろ任用している。元綱の死後は寛政元年（一七八九）に同じくオランダ通詞であつた堀門十郎を招聘しており、これらのことは自身のオランダ語学習も考慮してのことであつただろう。

松村元綱の採用は、安永二年から始められていた博物学書『成形実録』³ 編集におけるオランダ語調査のためと言われている。松村にはオラ

ンダ通詞本良英の翻訳書を校訂した『和蘭地図説略』『和蘭地球図説』『天地二球用法』『太陽距離曆解』や本木との共訳『象眼儀用法』等の地理書・天文書があり、安永八年鹿児島に設置された天文観測所明時館（天文館）の運営においても影響をあたえうる立場にあつたと思われる。またこれらの書は、長崎や江戸を中心とした西洋への関心、幕府天文方におけるケプラーやコペルニクスの天文学説研究とも密接に関係している。

堀門十郎は、オランダ大通詞をつとめた人物で、やはりオランダ商館長ティツイングの紹介による任用であつた。堀もまた『成形実録』を改撰した『成形図説』のオランダ語を担当したのである。堀は、幕末の京都におけるオランダ語研究の第一人者であつた辻蘭室の師であつたと言われ、その子孫も薩摩藩に仕えた。

重豪はまた、松村や堀を紹介したティツイングをはじめとして歴代のオランダ商館長とも親交を深めている。ロムベルグ、パーケレル、ヘンミシ、ズーフ、プロムホフといった人々がそうである。特にズーフが『ズーフハルマ』という有名な蘭和辞書を編纂した時には、清書用の用紙を送るなどの便宜をはかっている。このように蘭学を中心とする日本国内の西洋学術の理解促進は、いち早く薩摩藩にも影響を及ぼしたのである。

そして十九世紀に入ると、日本を囲む海の様相が急速に変化していく。享和三年（一八〇三）には、長崎にアメリカ船が来航し貿易を要求。翌文化元年（一八〇四）にはロシア使節レザノフが長崎に漂流民を護送して貿易を求めた。

さらに文化五年、今度はイギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵入してオランダ人二人を捕らえ、オランダ商館の引き渡しを強要し、責任を問われて長崎奉行松平康英は自決、佐賀藩主鍋島齊直は長崎警護に不備があつたとして蟄居を命じられた（フェートン号事件）は、斉彬誕生の

前年のことである。

特に、この時期のロシア勢力の南下は幕府に神経質な対応を迫らせた。幕府は長崎通詞にオランダ語に加えてフランス語学習も認めていたが、文化六年、ロシア語と英語も学ぶよう命じた。また文化八年には、幕府天文方に「蛮書和解御用」という蘭書の翻訳研究の専門の部局を設けて、オランダ語を通して西洋事情により一層精通することのできる体制を敷いている。

したがって、斉彬が西洋の文物に早くから興味関心を示したということの背景に、曾祖父重豪の影響があったことはもちろんのこと、最早日本が国際社会から孤立することが不可能な時代の入り口に立たされていたということの意味は大きい。ここに、いわゆる西洋趣味の域「蘭癖」から「蘭学」へ至る理由があった。

③ 斉彬を育んだ蘭学者たち

集成館事業の担当者のひとり市来四郎は、斉彬のオランダ語学習のはじまりは、斉彬が三十余歳のころで、杉田玄白の孫杉田成卿に学んだ薩摩藩士吉井泰論から教授されたと記している。

吉井は斉彬より四歳年下で、斉彬の近くに仕えていたのは、天保元年（一八三〇）から同十二年までのことであるという。斉彬が二十二歳から三十三歳のころのことである。また吉井は、西洋砲術家高島秋帆にも学んだというが、斉彬周辺の環境を考えれば、斉彬のオランダ語学習はもう少し早い時期に始められていてもよさそうである。

例えば天保六、七ごろ、斉彬は、蘭学者宇田川榕庵に育兒院のことを蘭書で調査してもらって、それを翻訳させたという。榕庵は大垣藩医江沢養樹の子で、津山藩医で大槻玄沢に学んだ宇田川榛斎（玄真）の養子となってこの家を継いだ。

養父の榛斎は、戸塚静海・坪井信道・箕作阮甫らを育てた蘭学の先駆者のひとりである。大垣藩には斉彬の曾祖父重豪の娘種姫が嫁ぎ、宇田川家とも重豪の特医曾繁を通じて交流があったというから、蘭学の指導を受けるには最適の人物のひとりであっただろう。榕庵は幕府天文台の翻訳員に出仕し、その研究は、薬物学・植物学・化学といった自然科学の他、地理・歴史・軍事等にまで及んでいる。

一方、天保八年には、鹿児島の人々を驚愕させる事件が起こっている。モリソン号事件である。日本人漂流民七人を乗せたアメリカ船モリソン号が、漂流民の日本送還を日本との通商交渉の契機とするため、六月二十八日には浦賀に七月十二日には薩摩山川に來航し、それぞれ砲撃を受けて退却したというものである。

薩摩においてこの事件を担当した家老島津久風は、新式砲の採用を藩主島津斉興に訴えて、翌九年島居平七・平八の兄弟を当時長崎において西洋砲術を究めていた高島秋帆のもとに遊学させている。そして、天保十三年には、高島流を御流儀砲術として正式に採用し、島居兵七（成田正右衛門）をして教授させた。

高島秋帆は、長崎町年寄高島茂紀の子として寛政十年（一七九八）に生まれた。秋帆は、出島砲台の係をしていた父から荻野流や天山流砲術の教導を受けたが、西洋砲術が極めて優れていることを知ってから、出島のオランダ人に聞いたり、町年寄の特権を活用して多くの蘭書を購入し、通詞に兵学関係の図書を翻訳させて知識の習得につとめた。天保六年ごろには西洋の兵学を教授するまでになったと言われ、アヘン戦争の情報もたらされた直後、長崎奉行所に対して今後西洋式の兵制を取り入れるべきであると訴えた。幕府もこの訴えを重く受け止め、秋帆を江戸に呼んで、天保十二年に武蔵国徳丸ヶ原（現東京都板橋区高島平）で輸入した砲四挺の実射と歩兵騎兵の練兵を実施させた。その結果、高島流砲術を採用することとし、江川太郎左衛門への伝授を命じた。

ところが、幕府守旧派に危険人物であると目された秋帆は、翌十三年に捕らえられ、実にペリー来航の嘉永六年（一八五三）までの十二年間、関東に幽閉された。赦免されてからは江川太郎左衛門のもとにあって鑄砲に従事し、晩年には幕府講武所砲術師範となった。したがって、薩摩藩が藩士に高島流砲術を学ばせたのは幕府よりも早く、藩がこの流儀を採用したのは、秋帆が幕府に捕らえられた年であった。

高島秋帆が捕らえられた天保十三年は、アヘン戦争が終わった年でもある。そしてこの年薩摩藩は、高名な蘭方医戸塚静海を江戸詰の藩医として採用した。文政十一年のシーボルト事件では三カ月間投獄されたが、赦免後はそのまま後進の指導にあたった。天保二年には江戸に帰って開業し、薩摩藩医となつてからは斉興・斉彬の二代に仕えている。静海は、吉井泰論が転役した翌年に薩摩藩に召し抱えられており、静海に期待されたのは医師としての能力だけではなかつたはずである。静海には黒江綱介・八木元悦・松木弘安が入門している。

島津重豪や斉彬がシーボルトに面会した文政九年の江戸参府に同行して江戸に出た伊東玄朴はその後、同地にとどまり、天保四年には蘭学塾象先堂を開いて多くの若者を育成するとともに、江戸で佐賀藩の藩医となつた。嘉永二年、オランダ商館の医師モーニッケがバタバアから取り寄せた痘痂を佐賀藩は譲り受け、種痘に成功した。藩主鍋島直正は痘痂を持って参勤したが、この時玄朴は直正から痘痂を薩摩藩邸に届けるよう指示されている。斉彬は、五男儔次郎をはじめ邸内の十人ほどの小児に種痘を接種し、さらに痘苗は斉彬から前水戸藩主徳川斉昭に届けられた。象先堂の門人帳には、嘉永年間に薩摩藩の鈴木元友・松木弘安（寺島宗則）・田中玄清・八木元悦（称平）の名がある。

斉彬の世子時代に影響を受けた人物に坪井信道がいる。信道は嘉永元年に没したから交流の期間は短かつたが寄せた信頼は大きい。信道は特に臨床医学に優れていたと言われ、医学教育の近代的研修方法を取り入

れたことで多くの人材を育てた。また、戸塚静海のあとを受けて斉彬の侍医となり、斉彬の臨終を看取った坪井芳洲（大木忠益）は、信道の娘婿であった。

斉彬と蘭学者たちの交流を語る時、その代表的な人物に高野長英がいる。長英と斉彬は、投獄の前から交流を重ねていたようであり、長英は脱獄後も一時薩摩藩を頼つた。嘉永二年には薩摩藩士能勢甚七を訪ねて密かに薩摩入りしたと言われ、翌三年の三月ころには、斉彬自身長英の潜伏状況を知っていて、江戸麻布新町に隠れていることを、長英のシンパであった幕臣筒井政憲や宇和島藩主伊達宗城、伊東玄朴にも知らせたと日記に書いている。⁶⁾長英は、この年、青山百人町にいるところを追手に発見され、自害して四十八歳の生涯を閉じたが、斉彬の信任は厚く『知彼一助』『三兵答古知幾』『土蔵台場築造法』『兵制全書』等を訳して斉彬の依頼に応えた。

当時海外情報に最も精通していた人物のひとりに箕作阮甫がいる。天保十年から幕府天文台に出仕し、蛮書和解御用に携わっている。阮甫はその後もっぱら蘭書の翻訳を中心とした活動に移行し、嘉永二年には、島津斉彬の依頼によって蒸気船の製造方法を記したオランダのフェルダムの著書を翻訳し、『水蒸船説略』六巻と付図一卷を出版した。

さらに嘉永六年、ロシア使節プチャーチンとの交渉のため、幕府応接掛筒井政憲らにしたがつて長崎に派遣されていた阮甫は、その帰途の安政元年、参勤交替で参府途中の斉彬と山口の吉田で面会し、ロシア事情や長崎の様子を聞かれたこと、薩摩藩が近々西洋式の軍艦を建造する予定であることを聞いたこと、クロノメートル（晴雨計）と薩摩で作られたガラス瓶（薩摩切子であろう）を見せられたことを記録している。⁷⁾阮甫はその後、姫路でも斉彬に呼ばれ、琉球と奄美や屋久島の交易場に関する話が出たというから、両者の親交にはかなり深いものがあつたのであろう。

足立長雋は、安政四年薩摩藩に召し抱えられて集成館事業の推進に大きな影響を与えた川本幸民の師である。安永五年（一七七六）の生まれで、江戸藩邸の薩摩藩医で鳥津重豪の侍医であった足立梅庵に幼少のころより学び、足立の姓を許された。その後宇田川榛斎の推挙で加賀藩医となっていた吉田長淑に蘭方医学を学んでいる。一方、足立梅庵の父踏怒も薩摩藩医であり、梅庵の長男梅溪も、足立長雋に学んだ佐藤泰然の佐倉順天堂で佐藤舜海に師事した。

④ 実用の学問の重視

薩摩藩における西洋の知識導入に影響を与えたつぎの世代の蘭学者に長州藩医青木周弼がいる。江戸に出て坪井信道に蘭学を学んだが、のちに同門の緒方洪庵と共に信道の師宇田川榛斎の薫陶を受け、さらに長崎に出てシーボルトの門人となった。天保十年（一八三九）からは萩藩医となつて後進を育成していた。その中に、薩摩藩御小姓組有馬洞運・谷山郷士小倉玄昌・郡山郷士岩崎俊斎の三人がいる。

青木周弼と同門の緒方洪庵は、大阪に適塾を開いて蘭学教育における西の雄となったが、適塾の門人帳「適々齋塾姓名録」には、六三六人が記録されている。その中に薩摩藩出身者として、黒江綱介・八木元悦・有馬洞運・岩崎俊斎・小倉玄昌・松崎鼎甫・大田恕斎の七人の名がある。このうち有馬・岩崎・小倉の三人は、もともと藩命によって青木周弼に入門していたが、安政元年（一八五四）二月江戸に参勤途中の斉彬に呼び出され、適塾への転塾を命じられた。⁽⁸⁾さらに有馬・松崎・岩崎の三人は、安政四年斉彬から大村益次郎の蘭学塾鳩居堂への転塾を命じられ、⁽⁹⁾江戸に赴いている。

坪井信道の門人杉田成卿もまた、集成館事業で活躍した人材を育成している。嘉永三年には、薩摩藩で銃砲の製造を担当し、後に水戸藩に派

遣されて反射炉の建造に従事した竹下清右衛門が成卿に入門し、この時の同門に後年薩摩藩士となつて集成館事業に深く関わることとなつた石井密太郎（石河確太郎）がいた。また、これに加えて安政三年には、薩摩藩士中原猶介が入門している。坪井信道の養子となつた坪井芳洲は、父信道の跡を受けて薩摩藩医となった人物である。彼は、安達梅庵の紹介で斉彬の知るところとなり、信道没年の嘉永元年のころから白金今里の薩摩藩邸に住んで、兵書の翻訳にあたっていたといわれ、安政元年に薩摩藩医となり、蕃書調所教授手伝もつとめた。

安政五年七月、斉彬が鹿児島で没した時に治療にあつたのが芳洲であり、不調を訴えた九日から逝去の十六日まで投薬治療に専心している。芳洲の記した容体書の十五日には「至極の御難症にて薬効の奏効なく、御大切恐れ入り奉る御容体に伺い奉る」とある。のちに彼は斉彬の死因はコレラであつたと診断しているが、斉彬の死因については諸説がある。多くの蘭学者のなかで、最盛期の集成館事業に最も影響を与えたのは川本幸民であろう。安政三年蕃書調所教授手伝となり、安政四年には薩摩藩に召し抱えられた。松木弘安も戸塚静海の塾にいた弘化四年ころ、幸民から『理学問答』の講義を聞いて、はじめて理学というものを理解することができたと記している。⁽¹⁰⁾このように、日本の蘭学界をリードしていた多くの学者たちが集成館事業の周辺にいて、新しい西洋の学問の知識や情報を提供していたのである。

さて、つぎに実際に集成館事業を推進した人々について記してみよう。まず、石河確太郎は大和国高市郡畝傍（現奈良県橿原市）の出身で、浪人となつて江戸で蘭学修行していたところを同塾の薩摩藩士に見込まれ、ついに薩摩藩に召し抱えられて集成館事業に従事した人物である。この薩摩藩士が、弘化三年（一八四六）ころから藩において大砲製造の係を担当した竹下清右衛門である。

竹下は、嘉永四年（一八五二）の春、杉田成卿の塾に入った時に、当

時石井密太郎（密庵）と名乗っていた確太郎と出会った。密太郎は、江戸に出る前に長崎においても苦学して蘭学を修行したといい、すでにこのころには相当の学力を身につけていたが、収入に乏しく竹下が蘭書の翻訳を依頼するなどして、なにくれとなく生活の面倒をみていたようである。竹下に見れば、密太郎の才能をいわずに薩摩藩のために役立たないと目論見であったが、そこへ師の杉田成卿が、密太郎を津藩藤堂家の蘭学者に推薦するという話を聞いて、ついに藩へ密太郎を採用してもらおうよう働きかけることを決心する。そしてちょうど嘉永五年の春、帰国する岩城三左衛門に国元との調整を依頼している。しかしこのことは、すぐに結論の出るような問題ではなく、嘉永七年五月には竹下自身が水戸へ派遣されて、水戸藩の反射炉建設に従事することになったため、密太郎採用問題はその後岩城が引き継いだようだ⁽¹⁾。

ともかく、安政二年には斉彬の決裁も得られて、すでに藤堂家に仕えていた密太郎は山田正太郎と変名して逃げるようにして薩摩に下った。この年の八月、一家五人でやってきたという。石河はその後、反射炉や蒸気船の建造、砲台の建設等を担当すると共に藩士に対する蘭学の講義もしている。そして安政四年五月、帰国した斉彬に初めて目通りを許され、石河確太郎と改名して藩士に取り立てられた。

藩士となつてからそれまで以上に重用されたが、安政五年の斉彬没後も石河の能力は高く評価されている。例えば、大坂（大阪）と石川の出身地である大和地方に東西の物産を交換する会所を設け、その利益を海防にあてようとする提言や、南北戦争によってアメリカから原綿を得にくくなっているイギリスに国産の原綿を輸出しようという提案をして、聞き届けられている。特に、文久三年（一八六三）の薩英戦争後は、薩摩藩における洋学研究機関開成所の設置や英国留学生の派遣、鹿児島にイギリスから輸入した機械による紡績工場建設の提言をして、これらはことごとく実現した。

石河は、しばらく開成所の教授をつとめた後、大和会所の仕事に携わり、明治元年（一八六八）から堺紡績所の建設と運営にあたった。そして、明治五年以降は日本各地の紡績業の育成に努め、日本紡績業創業の人としてその名を残している。

薩摩藩出身の蘭学者として記すべき人物に、八木称平・松木弘庵・中原猶介の三人がいる。八木称平は天保三年（一八三二）の生まれで、藩命により嘉永五年、緒方洪庵の適塾に入門し、二年余りを大坂で起居した後、安政元年には江戸の伊東玄朴の象先堂に移った。この時の八木の請人に戸塚静海の名があることから、斉彬は、藩士の蘭学修行を静海に

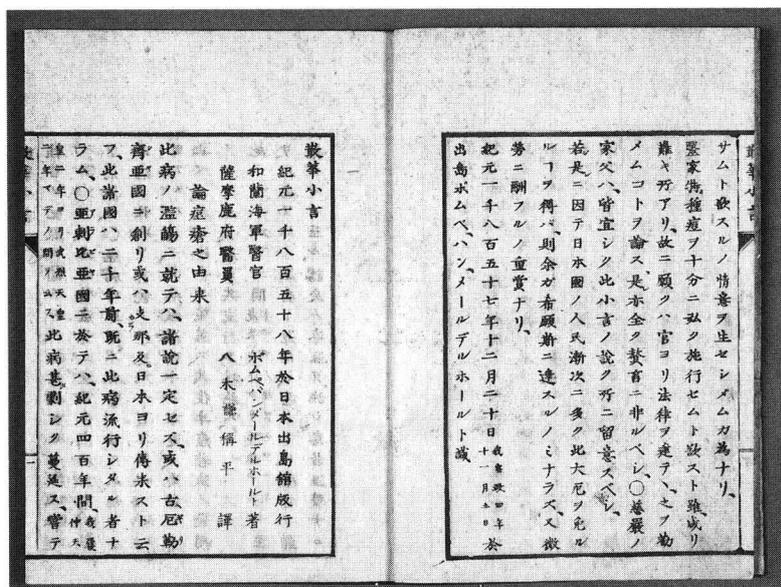


写真2 『散華小言』（高古集成館蔵）

斡旋してもらっていたことが窺える。

さらに八木は、翌安政二年になると坪井芳洲が薩摩藩医となって空席となっていた日習堂の塾頭となっている。この時代日習堂を主催していたのは坪井信道の子信良で、信良は八木を高く評価していた。また八木は、大坂の適塾に入る前に長崎にも遊学し、種痘の痘痂をもたらししたモーニッケとも接触があったらしい¹²⁾というから、蘭学の学力については相当なものがあつたのだろう。八木はその後鹿兒島に帰って、反射炉建造などの事業に従事したものとと思われる。そして、安政五年の斉彬の死の前後長崎でポンペのもとにあつて、ポンペの種痘書を翻訳して『散華小言』を著した。

また八木は、万延元年(一八六〇)、長崎の小島病院に入っている。この病院は、佐倉順天堂の佐藤泰然の次男で幕府の医師松本家を継いだ蘭学者松本良順が、ポンペを院長として設立したものである。良順は文久二年、江戸に帰るに際して、その後任に八木を強く推した。八木はこのことを受けて、藩の了承を得るため一度帰国するが、再びの長崎行きはかなわなかった。良順は自伝に、八木は一度鹿兒島に戻って家族を連れて帰って来ると言つたというが、藩命での長崎遊学であれば、藩の意思を確認することが第一であつただろうし、この年の夏には生麦事件が起こっていた。したがってその時の鹿兒島の情勢は、薩英戦争を前にした緊張感にみなぎっていただろうから、とても長崎での長期滞在は実現することではなかっただろう。八木は、薩英戦争後開成所教授となり、慶応元年(一八六五)三十三歳で没した。

松本弘安は、天保三年、出水郷脇本(現阿久根市脇本)の郷士長野増右衛門の次男として生まれ、天保七年、五歳の時に伯父の松本宗保(雲徳)の養子となった。宗保は天明六年(一七八六)の生まれで、文化元年、長崎に出走、鹿兒島に帰って医学を学んだ後、再び鹿兒島を出て、松浦五島で眼科を学び、文政六年には、藩命により西洋外科修行のため

三年の長崎留学を許された。宗保は、この時オランダ通詞吉雄幸載の塾に入つて、オランダ商館付医官として来日したシーボルトから直接学ぶ機会を得ている。したがって、宗保の留学期間は何度も延長されたよう¹³⁾だ。

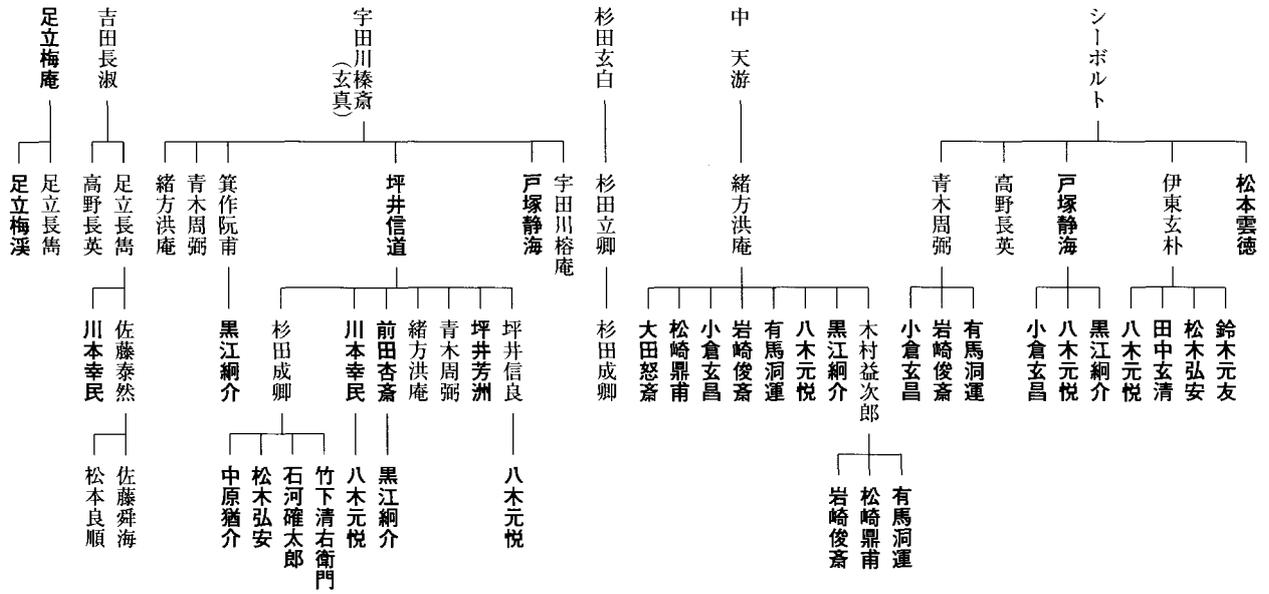
文政十年五月二十七日から六月一日まで、シーボルトが執刀した熊本藩士野口律兵衛の子保右衛門の頭部腫瘍手術の記録には、戸塚静海や高野長英の名と共に松本雲徳の名が見えている。宗保は、天保四年、藩主斉興から表医師に任じられ、長崎居附を命じられて、同六年には奥医師に進んだ。弘安も当然長崎に移っており、同十年から父と共に写真術で有名な上野彦馬の父で蘭学者でもあつた上野俊之丞の家に起居した。すなわち弘安は、幼少の時からオランダ語を身近なものとして学ぶ環境に生活していたのである。

天保十四年、長崎居附を解かれた宗保と共に鹿兒島に帰った弘安は、弘化二年の宗保の死によつて家督を継ぎ、はじめて弘安と名乗った。そして翌三年には、藩命により江戸に向け蘭学修行の旅に出立する。江戸に着いた弘安は、まず養父と同門であつた戸塚静海の日習塾に入り、間もなく川本幸民の講義を受けるようになった。さらに、嘉永四年には伊東玄朴の象先堂に入り、兵術・造船・築城・地理等の広い分野の知識習得に努めた。また、杉田成卿にも教えを求めたという。

嘉永六年の斉彬帰国に際しては、師の戸塚静海と共にその供を命じられ帰国の途についている。鹿兒島では、蘭書の翻訳や中村騎射場跡(現鹿兒島市鴨池)の製薬館、城内の製煉所、磯に建設中の反射炉の仕事を担当した。そして、翌年正月には斉彬の参勤に従つて参府し、象先堂に帰つて塾頭となり、藩邸では蒸気機関の研究に没頭している。さらに、安政二年、幕府が外交問題に対応して天文台翻訳局を独立させて蕃書調所を設置する。弘安は請われて教授手伝となった。ちなみに教授職には、箕作阮甫・杉田成卿の二人がおり、教授手伝七人の中には川本幸民がい

薩摩藩関係蘭学者の系譜

※ゴシックは薩摩藩医・藩士



た。

弘安は、安政四年久々の斉彬の帰国に従って鹿兒島に帰り、最盛期の集成館事業の現場で活躍する。すなわち、石炭ガスによるガス灯の製作、写真技術の研究と電信機の実験等がそれである。翌安政五年、のちに咸臨丸と名付けられる幕府軍艦ヤーパン号が鹿兒島にやって来た時、斉彬の供をしてオランダ海軍の士官たちに面会した弘安は、いくつかの専門的な質問をしているが、その知識の正確さと敏速な判断力に、オランダ人たちは心から驚いたようだ⁽¹³⁾。そしてこの年の六月には長崎に派遣され、翌月の斉彬急病の報を受けて急遽鹿兒島に戻ったが、時すでに遅く、到着は斉彬の死の二日後のことであった。

弘安は、その後、蕃書調書教授手伝に復帰し、文久元年の幕府遣欧使節の随員として渡欧する。帰国は翌二年十二月であったが、この年八月の生麦事件後の情勢変化があつてただちに帰藩。翌年七月の薩英戦争に際しては船奉行であった。ところが、この時五代友厚と英国艦の捕虜となり、一時江戸に潜伏。元治元年（一八六四）許されて、長崎に向かえとの藩命で江戸を出発。同地で五代と再会し、そのまま、翌慶応元年の薩摩藩英国留学生派遣に参加している。そして、約一年年余りの旅から帰国すると藩の開成所教授に就任し、このころから寺島に改姓している。明治に入ってから、寺島宗則と名乗り、専ら外交官としての道を進んで、明治六年四十二歳の時外務卿となった。

弘安は、幼少のころから蘭学を学習して成長し、さらに医師としての研鑽を積みながら斉彬のもとで実学としての蘭学、あるいは洋学を自分のものとしていった。その経験が、後年の外務卿寺島宗則の原点にあつたといつていい。

中原猶介は、天保三年鹿兒島城下に生まれている。父は中原休左衛門尚道といい、猶介は尚道の次男である。弘化三年十五歳で御庭方助並びに御製薬掛助となり、嘉永元年御庭方兼製薬掛に任命された⁽¹⁴⁾。そして、

翌嘉永二年から嘉永四年まで集成館事業で重要な役割を担うことになる江夏十郎と共に長崎出張を命じられている。帰藩後は、斉彬の藩主就任と同時に開始された集成館事業推進の主要な役割を担い、反射炉や砲台の築造、蒸気船の建造や電信機や水雷の実験に忙しかった。

さらに、安政三年には江夏十郎の子壮七郎と共に江戸に出て、杉田成卿に入門し翌四年にかけてその知識を深めている。ただたんに机上の論を学ぶのではなく、すでに実地においてさまざまな経験を積んでいた猶介にとって、広汎な蘭学の知識を有する成卿に直接指導を受ける機会を得たことは、その後の集成館事業や藩の軍制改革の推進において役に立った。安政五年の斉彬没後は、江戸に出て西洋砲術や造砲技術を教授する江川塾に入って塾頭までつとめたが、文久二年の冬帰藩して英艦襲来について防備を具申し、翌年藩命により長崎で諸交渉にあたった。その後猶介は明治元年の戊辰戦争に従軍し、越後長岡で負傷して戦場に没している。

⑤ 技術者たちの蘭学受容

いままで述べてきたような学者集団のもとに技術者の集団がある。例えば砲術や鋳砲に関しては、主に成田正右衛門・竹下清右衛門・田原直助等がこれにあたった。

成田正右衛門は、享和三年（一八〇三）に鹿児島で生まれ、先に記したようにはじめは鳥居平七と称していた。長崎の西洋砲術家高島秋帆について学び、天保十三年（一八四二）藩が高島流を御流儀砲術に取り立てた時にこれを教授した。ところが同年秋帆が幕府に捕らえられたため藩は平七にも嫌疑のかかることを恐れ、成田正右衛門と改名させたのである。

弘化三年（一八四六）、世子であった斉彬は、成田が指揮する御流儀



写真3 明治5年の集成館（尚古集成館蔵）

砲術の発火演習を谷山中塩谷（現鹿児島市小松原町）で検閲、翌弘化四年には砲術館を設置して吉野（現鹿児島市吉野町）において約一千人の大操練を実施した。また嘉永元年（一八四八）、御軍役御手当掛であった成田は、海岸防御其外射術専用の準備掛を命じられ、領内一統の入門者への教授を指示されている。嘉永五年には、沿岸各地の砲台改築の命を受け、本格的な砲台を整備した。

竹下清右衛門は、文政四年（一八二二）鹿児島に生まれ、弘化三年に大砲鑄製のため設置された鑄製方に出仕している。嘉永元年には御徒目付となり、この年長崎に派遣された。また、長崎行きは数度に及んだともいう。嘉永三年の甲突川砂揚場（現鹿児島市天保山）における砲術訓練の際、新製の八十ポンド砲打ち試しは竹下か田原の他に人はないと藩主斉興が言ったというから、その技量は相当なものがあつたのであろう。竹下はその訓練のあつた年、琉球人参府に従って江戸に行き、翌嘉永四年の春、杉田成卿に入門した。ここで石河確太郎を知り、彼が薩摩藩へ仕官するきっかけをつくつたのである。

また、嘉永六年から安政元年にかけての二度のペリー来航に際しては、たびたび、浦賀や下田を訪れて艦隊の様子を調査している。このころ鹿児島で建造中の西洋式軍艦昇平丸に当時最新式の造船技術が取り入れられているというが、もしかしたら竹下による報告の成果かも知れない。さらに竹下は、このころ江戸藩邸で建造中の蒸気船の建造や砲台の建造にも関わっていた。彼も杉田成卿門下であつたから、この方面の研究が江戸留学の主目的であつたものと思われる。

ところが、かねて徳川斉昭から依頼のあつた水戸藩反射炉建造に伴う技師派遣の要請を、斉彬が受け入れて、この任務を竹下に命じたため、竹下は、安政元年の五月から水戸に行くことになった。水戸の反射炉建造を終えて彼が帰国するのは、斉彬死後の安政六年のことであるから、この間は直接集成館事業に関わることはなかつたと思われる。ただ、鹿

児島においても苦心慘澹して反射炉を建造中のことであり、情報交換はある程度おこなわれていたのではなからうか。

田原直助は、文化十年（一八一三）鹿児島に生まれている。斉興の時代は鑄製方に出仕し、滝之上（現鹿児島市稲荷町）にあつた火薬製造所にも勤めており、嘉永元年に建てられた水神碑に御徒目付としてその名がある。また竹下と共に成田の門弟であり、砲術に関しては他に抜きんでていた。

斉彬が藩主になつた嘉永四年、漂流の末、十年のアメリカでの異国生活を過ごしてきた中浜万次郎が、琉球にたどり着き、鹿児島に送り届けられてきた。江戸に向かうまでの約四十日間、万次郎は城下西田町会所に留め置かれたが、その時、田原は万次郎からアメリカの造船術を聞いて、船大工三十四名と共に越通船という西洋式の小型船を造つた。この船に蒸気機関を乗せて、日本初の蒸気船雲行丸となるわけであるが、以降、田原は台場の築造や反射炉の建造に関わり、その手腕を洋式造船の分野にも発揮していくことになった。

また直助は、嘉永四年の末ころから翌年にかけて長崎に派遣されている。嘉永五年正月の斉彬から戸塚静海宛の書簡によれば、オランダ軍人マーネンから田原が大砲製造のこと、台場のこと、造船のこと等詳しく聞くことができたと記している。また、伝馬船鉄張りの模型を取り寄せたこと、マーネンが乗つて来たオランダ船の構造が鉄船であつたこと等の情報が田原から寄せられていることがわかる。藩ではこの時期、内部構造は西洋式で外部の装飾は日本式の伊呂波丸を建造中であつたから、田原の長崎出張は当然このことも意識してのことであつただろう。その後藩は、本格的な西洋式軍艦昇平丸を、嘉永六年五月から建造に着手し、翌安政元年の暮れに完工させた。田原はその後も、大元丸・承天丸・鳳瑞丸・万年丸の建造に携わり、『造船製式』二巻・付図一冊を著している。

⑥種痘普及の事例

薩摩藩の蘭学は、このように主として集成館事業を推進し、近代化をはかるという藩主導のもとに発展した。したがって地域蘭学の立場からこれを見るならば、いささか諸藩とはその目的、内容と規模、普及の事情が異なっていると言えよう。

ただし、まったく藩内における蘭学浸透の余慶が領内の諸地域には及んでいなかったかと言えば、そうではなかったのではないかという資料や報告を最近確認することができた。それはいずれも種痘に関することである。

佐賀藩医榎林宗建の進言によって、オランダ商館の医官オットー・モーニッケがバタバアから長崎に取り寄せた痘痂が、佐賀藩主鍋島直正の命で伊東玄朴の手で江戸の薩摩藩邸に運ばれたことは先に記した。同年十一月十五日付水戸の徳川斉昭宛始末斉彬書簡に、

一牛痘之儀最早御聞ニ入候や、此節内々肥前守（佐賀候）持越シ、小児江十人程も植付申候、近々私方小児江も植付候筈ニ御座候、蘭説通り少シ之掛念も無之よし、当地蘭医之者共も感服之よしニ承り申候、序ゆへ奉申上候、

とあり、十二月二十七日の斉昭宛書簡に、¹⁶ 斉彬は次のように記している。

一牛痘之苗奉差上候、廿日比落痂仕候種不宜、夫故延引ニ相成申候、并ニ牛痘新書和解相添入御覧申候、私子供之儀、御尋難有奉存候、当時男子兩人、三才・当才罷在候、三才之方兎角病身ニて、当時も不快中ニ御座候間、植付出来兼候故、当才儔次郎と申もの江植付申候、両方江八ヶ所付候処、不残出痘仕候、

（中略）

猶々、牛痘二十日位は苗も取用ニ相成候よしニ御座候、人痘之痂

植付と同様ニて宜敷御座候よし、

（別紙）

又添て奉申上候、牛痘植付様之事、只今医師申出候ニは、落痂植付ランセツタ宜敷、乍然工者ニ無之候ては、人痘程付き兼候由御座候間、大概俊齋江御尋被遊候方可然申候条、此段奉申上候、以上、

すなわち、斉彬は痘痂を入手してより十二月二十七日までの間に、おそらく藩邸内の十人程の小児と実子儔次郎にも種痘を施し、落痂の種に「牛痘新書和解」を添えて斉昭に送っている。また明けて嘉永三年一月二十四日付と思われる斉昭宛斉彬書簡に、¹⁷

御別紙拜見仕候、牛痘御用相成候由難有奉存候、とあることから、水戸邸内においても薩摩藩邸から送られた痘痂によって種痘が試みられたのであろう。

さて、薩摩藩における種痘が、江戸藩邸のみならず、領内でも施されたことは知られている。しかしながら、それはもっぱら史談会編『国事鞅掌報効志人名録』第一輯（明治四十二年）に記載された医師前田杏齋（元温）の次の履歴に拠っていた。

嘉永二年再び長崎に出で蘭医モンニツケに就き業を学ぶ。時に牛痘舶来す。モンニツケ初めて種痘を町医阿部魯庵の子及通事某の子二人に試む。其経過を實見し。其落痂を拾ひ。即時に帰藩す。藩命して城下に行はしめ。尋て論告を發して藩内に行はしむ。然るに人未だ其理を覺らず。種々惑説を唱へて応ぜず。藩侯特に島津忠義故公爵を始め七八人の子女に種痘を命ぜらる。元温翻譯書を示し。其理を説明す。是より漸次種痘を請ふ者多し後には一日百八十名に上りしと云ふ。元温又医を業とする者に其法を授け。普く領内に施行せんことを請ふ。藩許して之を行はしむ。元温悉く其法を授く。是より藩内始て種痘行はる。

前田杏齋は、文政四年（一八二二）三月十五日鹿児島に生まれている。弘化二年（一八四五）藩命によって京に上り禁裏付の典医に学んだ後、江戸に赴いて幕医多紀楽真院について一年の間医術を修業した。また父の病気によって一時帰藩したが、再び江戸に出て坪井信道に西洋医学を学んでいる。そして、嘉永元年（一八四八）の信道の死によって、いったん鹿児島島に帰り、さらに翌二年には長崎に出てモーニッケの指導を受けた。

この年七月、バタビアからモーニッケのもとに届いた痘痂によって、種痘は短時日のうちに全国へ伝播していった。薩摩藩についても、前田杏齋の出崎が種痘の修得を目的としたものであったか否かについては明らかではないが、痘痂が十一月には伊東玄朴によって江戸の斉彬のもとにもたらされ、モーニッケに学んだ前田杏齋によって薩摩の地にもたらされたことは確かである。そして前田杏齋の履歴によれば、時の藩主であった島津斉興の命によって、斉彬の弟久光の嫡男忠義（八歳）をはじめ七、八人の子女に種痘を施したとある。ただしこの時の記録がみえない。

そこで、当時の諸資料を瞥見したところ、種痘採用の一連の動きと思われるものを「種子島家譜」に見出すことができた。種子島家は、中世以来の種子島島主であり、近世には島津家縁族となり家格は一家（重富・加治木・垂水・今和泉の四家）に次ぐ一所持（古来より一所の地を領する家）であった。「種子島家譜」は、その種子島家の系譜および関係資料を取めたものであり、種痘に関連する記事はつぎのとおりである。¹⁸

嘉永三年

正月十一日 吉良元民をして、種痘の術を前田杏齋に学ばしむ

二月十五日 前田杏齋をして二女（波津・多慶）に種痘せしむ

安政三年

二月十日 藩邸の有司相議して、牛痘の種を致す、是に於て此の法、創めて我が島に行はる
文久元年

四月十八日 医師河東三折をして、牛痘を鹿邸に在る者に種多しめ、而して帰って之を島中に施さしむ

これによれば、種子島家の医師吉良元民が命によって前田杏齋から種痘を学ぶのが嘉永三年正月十一日であるから、杏齋は少なくとも嘉永二年中には鹿児島島に帰っていないなければならない。その上で杏齋は藩庁に復



写真4 整理中の黒江家文書（高岡町教育委員会蔵）

命したものであろう。藩庁は杏齋の報告によって種痘の有効性を認め、ただちに諸家に対し、種痘学習のため諸家医師の種痘術修業を命じたものと思われる。

杏齋の履歴によれば、島津忠義を始め七、八人の子女に種痘を命じられたとある。忠義は、当時壯之助といつて一門家の重富島津家を継いだ父久光（当時忠教）と鹿児島島の重富邸に居住しており、二月十五日の種子島久珍の娘波津、多慶が鹿児島島の種子島邸で受けた種痘と相前後して杏齋から施されたものと想像される。

とすれば、藩が種痘学習を命じた諸家医師とは、少なくとも一門家四家と一所持（日置・花岡・宮之城・都之城の各島津家と種子島家）五家、合せて九家の医師であったことが考えられる。すなわち杏齋は、これら九家の適齢の子女に対し、藩庁から種痘を命じられたのではなからうか。また藩庁の動きが極めて敏速であったことからして、杏齋の出崎は、種痘学習を目的としたものであり、これには嘉永二年春から同三年夏にかけて在国していた藩主島津斉興の意志が強く働いていたものと思われる。

ところが、その他への普及については「種子島家譜」をみるかぎり、六年後の安政三年（一八五六）まで待たなければならなかった。二月十日の記事には藩邸とあるが、前後を考えれば、種子島家本城（榕城）の役人たちが儀して同島で種痘がおこなわれたということであろう。

そしてこれらは種子島ではじめてのことであると言っている。さらにそれから五年後の文久元年（一八六三）に、種子島家医師河東三折が鹿児島島の種子島邸で種痘をし、種子島に帰って島中に種痘を施したとある。種子島にかぎって言えば、同島で広く種痘がおこなわれるまで杏齋の種痘学習から十二年が経過していたことになる。

さて、前田杏齋による種痘術伝授は、家門の召抱える医師に対してだけではなかった。近年緒方洪庵の適塾門人として知られてはいたが、その詳細な履歴が判明していなかった高岡の黒江綱介について、黒江家文

書を受託している高岡町教育委員会の今城正広氏によってしだいに明らかになりつつある。¹⁹⁾

黒江綱介は、文政三年（一八二〇）六月高岡の蘭方医黒江循介の長男として誕生した。初め喜兵衛、忌名を長孝と言ひ、天保十四年（一八四三）に鹿児島島に出て、藩学造士館で学びながら奥医師上村恕庵に蘭学を学んだ。そして、弘化二年（一八四五）から翌三年にかけ江戸に出て、はじめ戸塚静海に入門、その後箕作阮甫に入門して箕作省吾の『坤輿図識補』の執筆を手伝っている。ところが弘化四年、綱介に琉球渡海の命が下り、同年より嘉永元年にかけて琉球に渡った。

綱介の琉球行きの背景には、弘化三年の琉球外交問題があった。すでに琉球には弘化元年から那覇にフランス人宣教師フォルカードと通訳が滞在して、通信と貿易を要求していたが、この年新たな事態が発生したのである。すなわち四月にイギリス船が那覇に来て宣教師ベッテルハイム一家を置き、四月から五月にかけてフランス艦隊が来航して再び通信と貿易を要求した。琉球はこの要求を拒否したが、艦隊はフォルカードにかえてアドネトル・チュルジュをのこして帰ったのである。この報告に驚いた幕府は、国の存亡にかかわる問題であるとして、同年六月異例のことながら藩主斉興の嫡男斉彬に、琉球外交問題を一任して薩摩へ帰国させることとしたのである。そして、薩摩藩士らによって構成された警備兵が琉球へ送られることとなった。綱介は西洋医学の修業を置いて今海を渡ることには不本意であった。また、思いのほかの長期にわたる滞在は、しだいに彼の健康をもむしばんでいったようである。

しかし、嘉永元年の琉球からの帰国後、同三年二月はじめに再び鹿児島に出て、前田杏齋から種痘の伝授を受けた。そして同月末には高岡に帰り、早速高岡の人々への種痘を開始している。間もなく二十人ばかりに種痘をほどこし、さらに同邑の医師西元貞、徳丸玄徳、吐師尚齋も種痘術の伝授を希望していると杏齋に書き送っている。²⁰⁾

その後の大坂行きと適塾入門については嘉永三年夏頃が正しいようであり、嘉永五年以降一時八木元悦とも同宿していた様子が書簡からうかがえる⁽²¹⁾。しかしながらせつかく適塾入門を果たしながら、琉球渡海の無理がたつたか綱介は健康を害し、同六年の冬頃帰国。翌七年十一月、郷里高岡において三十五年の生涯を終えた。

以上黒江綱介の履歴が明らかになることにより、前田杏齋が鹿児島に伝えた種痘が島津家門のみならず、領内の各地に普及していく様子の一端が知られる。綱介は、早くも嘉永三年二月のはじめには高岡から鹿児島に赴いて短時日のうちに杏齋から種痘術の伝授を受け、郷里に帰るやただちに種痘を開始しているのである。

杏齋から種痘術を授けられた地方の医者が黒江綱介ひとりであったとは考えにくい。今後の新資料の発見によって、鹿児島島の種痘の具体像がさらに明らかになっていくことが期待される。

⑦ 開成所における蘭学と英学

薩摩藩における蘭学の普及は、集成館事業の進展と共に拡大する。安政五年（一八五八）斉彬没後、斉彬の進めた近代化政策への反動もあってこの動きはいささか停滞したかにみえるが、すでに時代は大きく回転しはじめていた。

特に文久三年（一八六三）七月の薩英戦争の影響はすこぶる大きく、藩は改めて近代化のための洋学の学習と軍備の充実が急務であることを痛感した。藩は翌八月に長崎のグラバー商会を通じてアメリカに大砲八九門を発注し、薩英戦争で失った西洋船三艘を補いかつ藩海軍を増強するため、元治元年（一八六四）から、平運丸・胡蝶丸・翔鳳丸・乾行丸・豊端丸等の艦船を購入した⁽²²⁾。

一方同年六月には、洋学講習所ともいべき開成所を城下に開き、石

川確太郎・八木称平を教授として海陸軍砲術・兵法・操練・築城・天文・地理・数学・測量・航海・器械・造船・物理・分析・医学の諸科を置いて諸生を選抜し、これらの学術を修得させることを目的とした。また入学生に対しては英・蘭語を初歩より教授し、欧米の文明の学理を究めることを期待すると共に、今後海軍、航海、器械、大砲等の他国修業を希望する者については、まず開成所で一通り修学した者の中から江戸、長崎へ留学させるとしている。ただし、慶応二年（一八六六）よりは、陸海軍の教育について、それぞれ陸軍所・海軍所を独立させて実科教育に つとめ、幹部養成の速度をはやめることとした。また開成所掛員には、教授・助教・訓導師・句読師を置き、諸生は第一等から第三等までの等級が定められている⁽²³⁾。

さらに五代友厚は元治元年四、五月頃、藩に上申書を提出し、英仏兩國への留学生派遣を訴え、開成所教授石河確太郎は同年十月八日大久保一藏宛の上申書で英国への留学生派遣に関する自説を展開し、開成所の存在を前提として人材を挙げ、藩の重役や中堅に加えて少壮人材派遣の必要を強く述べた⁽²⁴⁾。その結果、留学生を英国に派遣することが同年十一月下旬に決定し、四名の使節、十四名の留学生と通訳一名の派遣が慶應元年一月に達せられた。一行は使節団長格として大目付新納久修他、大目付兼開成所掛（学頭）町田久成、船奉行松木弘安（寺島宗則）、同見習五代友厚、留学生として小姓組頭村橋直衛、当番頭畠山義成、同名越時成、開成所訓導師鮫島尚信、同句読師田中盛明（静洲）、同吉田清成、長崎遊学生・医師中村博愛（宗見）、開成所諸生高見弥一（土佐人）、同市来和彦（松村淳蔵）、同東郷愛之進、同森有礼、同町田実積、同町田清次郎、同磯永彦助、通訳として堀孝之（長崎人）の合計十九名であった。このうち十一名が開成所の関係者で占められており、石河の意見が重く用いられたということであろう。

開成所掛員として諸生の教育にあたった蘭・英・医学者で確認できる

者は、石川正龍(蘭)、八木元悦(蘭)、上野景範(英)・中浜万次郎(英)、巻退藏(前島密、英)、林謙藏(安保清康、英)、橘恭平(英)、嵯峨根重矩(英)、芳川顕正(英)、田中洪藏(英)、寺島宗則(英・蘭)、岩崎俊斎(蘭)、鮫島尚信(英)、春名三省(英)、足立梅溪(医)、有馬意運(医)、田中静洲(医)、市来宗七である。

開成所についての記録は、『鹿児島県史』第三卷、『薩藩海軍史』中巻に断片的にあるのみで、その詳細については不明の部分が多いのであるが、平成八年に発刊された『鹿児島県史料 玉里島津家史料』五巻に、慶応二年頃の開成所の教官生徒姓名書ではないかとして出ている文書がある⁽²⁵⁾ので紹介してみたい。

開成所教官生徒姓名書

江戸	御船奉行 教授勤	寺島陶藏(宗則)
	御広敷番頭 教授勤	石河確太郎
	助教	嵯峨根良吉(重矩)
島渡海	訓導師 加世田兼中	鮫島誠藏(尚信)
	右同 作州	春名三省
	右同	足立梅景
	右同 越後	田中浩造
	句読師	有馬意運
	右同	岩崎俊斎
	右同	市来宗七
島渡海	右同 小根占兼中	田中静洲
大島	右同 田布施兼中	上野敬介
	一等	加納雄左衛門
	二等	渡瀬幽雲
出崎		奥山嘉一郎
		岩山壮八郎

出崎	新納彦四郎
右同	田中喜次郎
右同	児玉幸助
右同	吉井太七郎
江戸	堀宗次郎
出崎	勝部善之助
	成松清之進
出崎	田中徳之丞
	鮫島武之助
	成松八之丞
	原田強兵衛
	渡瀬喜右衛門
	井上新十郎
出崎	上原勇左衛門

まずこの資料の年代についてみてみることにする。石川とともに当初から教授の任にあった八木元悦は慶応元年に死亡している。次に慶応元年一月から十二月初旬まで開成所にあった巻退藏が長崎から呼び寄せ助手とした林謙三・橘恭平の氏名が記されていない。これは、林が鹿児島では主に明治元年まで海軍の養成に従事したと記していること⁽²⁶⁾から、海軍所が開成所から独立した慶応二年五月二十四日以降であることを示している。また、英国留学生の使節の一員であった寺島宗則が慶応二年五月二十五日に鹿児島に帰着し、船奉行兼開成所教授に任じられている。さらにこの年五月頃嵯峨根重矩が、六月十八日には田中洪藏が教師に任じられていることから、それ以降の姓名書であることは間違いない。そして、上野敬介(景範)大島とあり、八木・石河の試験を受けて当初から句読師であった上野が、英人ウォートルズの通訳として大島に白砂糖製造所を建設するため出張していたのは、慶応二年年初から翌三年六月

である⁽²⁸⁾。一方、寺島と同様英国に留学していた田中静洲（島渡海とある）が帰国したのは、慶応三年年初であった。したがって、本姓名書は、慶応二年六月十八日から慶応三年年初までの約半年間に作成された開成所教官生徒の名簿であると判断される。

開成所は当初において、八木・石河の両教授が蘭学者であったこともあつて蘭学の学習が重んじられていたと思われる。しかしながら世界の趨勢、とりわけ薩英戦争後の両者の関係から、しだいに英学的重要性が増していった。上野景範は長崎遊学中に蘭学から英学に転じたと言われており、姓名書中田中同様島渡海とあつてこの時英国留学中の鮫島尚信も、文久元年三月藩命によって岩崎玄朴、田中幸斎らと長崎に出ている。そして、その医学修業の途中から何礼之の私塾で英学塾培社に入門している。また巻退蔵が開成所に招へいされるきっかけをつくつたのも鮫島であった。

上野は自身の履歴に開成所で、森金之丞（有礼）、市来勘十郎（松村淳蔵）、高橋四郎左衛門（新吉）他多人数に英学を教えたと記している⁽²⁹⁾。また培社には、前田正名、谷村小吉、岸良俊之丞（兼養）、川崎強八、高橋四郎左衛門（新吉）、鮫島武之助他数十名の薩摩藩士が入門していた⁽³⁰⁾。この姓名書においても出崎中の者が多いが、慶応二年の頃には開成所においてもすでに英学が主流となつていたことがわかる。

しかしながら開成所は、明治元年（一八六八）五月藩校造士館に合併され、新たに和学局が設けられて館内に和学局・漢学局・洋学局の三局が置かれた。また同年十月、医学院を設け洋漢両道を混用し、区別なく長を採り短を補うべきことが達せられた⁽³¹⁾。そして明治二年十二月、英医ウィリアム・ウィリスの鹿児島到着によって医学学校（当初西洋医院）が設けられることになる。

⑧ ウィリスの招聘と近代医学の普及

鹿児島島の医学が近代化の速度を早めることになるのはウィリスの功績が大きい。ウィリスは文久元年（一八六一）イギリス公使館の医官として来日し、同二年には生麦事件負傷者の手当、同三年七月の薩英戦争では英艦に同乗して負傷者の治療にあつた。また明治元年の戊辰戦争においては、大山巖の發議で京都相国寺養源院に設置された薩藩病院に赴き、新宮拙蔵、上村泉、石神良策、山下弘平、前田杏斎、児玉剛造らの医師たちの中にあつて手腕をふるつた。在京の藩当局は、一月二十九日付で藩医に対し漢蘭の差別なくウィリスの療法を見習うよう達している。その後ウィリスは官軍に従い、横浜、高田、柏崎、新発田、会津の軍病院を巡回している。

明治二年三月、ウィリスは政府より医学学校教官兼東京府大病院医官に任じられたが、六月大学校本校とこれに付属する開成学校と兵学校、医学学校兼病院の設置が決まり、七月にかねてドイツ医学採用を強く強調してきた相良知安が大学少丞に任じられる等、イギリス医学の排斥が決定的となり、この頃ウィリスの処遇が問題となつた。

政治的な問題もからんで、いささか複雑な経緯を経たが、結果的に英国と薩摩の友好関係の維持と戊辰戦争以来のウィリスとの特別な交友を慮つて、西郷・大久保の斡旋により、薩摩藩がウィリスを引き受けることとなった。月給九百ドル四カ年契約を結んで、ウィリスは門人林ト庵を伴い石神良策の案内で、同年十二月三日東京を発つて鹿児島に向かった。ウィリスはその後明治十年までの八年を鹿児島での医学教育と病院の運営に従事することとなるが、その内容について『鹿児島県史』第三巻が簡明に記している。

ウィリスの来任を迎へて明治三年正月、大いに医学学校・病院の職制

を改め、その機構を整備した。即ち医学校に学頭(三等官)以下一等教授・二等教授・一等助教・二等助教・都講・一等授読・二等授読・三等授読・授読試補等の職員を置き、学科の分担は、学頭は眼科・産科一切の治療及び薬剤・繙帯等を、一等教授は外科書、二等教授は内科書、一等助教は病理書、二等助教は生理書、都講は解剖書、一等授読は分析書、二等授読は究理書、三等授読は算学、授読試補は文法書をそれぞれ担任する事となつた。病院には大療頭(七等)以下中療頭・小療頭・史生・薬局掛・看頭・種痘兼器械掛・製薬掛を置いた。

また職制変革と同時に医学校御用掛兼病院掛を任命した。即ち石神良策・足立慎吾・有馬意運・山下弘平は医学校兼病院掛を命ぜられ、藤田圭輔・新宮拙蔵・山本淳輔・奥山玄良・永井文齋は同掛を委嘱されたのである。

三年五月再び医学校兼病院の職制を改め、等級を八等に分つた。

医学校兼病院

- 第一等 本草学・産科学・眼科学・外科学・内科学・病理学・薬剂学・動物植物学・解剖学各教授(一人宛) 医監(二)
- 第二等 小学校教頭(二) 病院執事(二) 翻譯書取締(二) 器械取締(二) 薬局取締(二)
- 第三等 小学校教頭助(二) 病院執事助(二) 翻譯書取締助(二) 器械取締助(二) 薬局取締助(二)
- 第四等 生徒取締兼塾長 外診掛(二)
- 第五等 処方掛(八) 器械預(三)
- 第六等 一等授読 種痘取締(二) 薬局定詰(八)
- 第七等 二等授読 史生(二) 薬局掛(二) 器械掛(二)
- 第八等 三等授読 種痘掛(二五)

これによつても医学校・病院が相当整備された大規模の組織であつたことが推察される。十月更に生徒取締兼塾長助、薬局定詰四人、器械預助四人を第五等に、史生二人を等外に新設した。なお授読は諸生二十人に一人宛、生徒取締は塾生三十人に一人宛の想定である。諸生には一・二・三等の等級があり、三石の俸禄を給した。医学校・病院ははじめ城下浄光明寺に設けられたが、明治三年城下滑川に移され、病院はレンガ造りの建物であつたことから赤倉病院と呼ばれた。⁽³²⁾ また同四年新たに産科医が置かれた。⁽³³⁾

明治四年三月、藩庁産科医ヲ置キ、求療ヲ聴スコトヲ達セリ、一御藩内産科療術未相開、難産ニテ斃候者不少候処、医学校御雇人之教師ウキリス、右之手術器械伝来、此節局中医師鮫島 齋・渡邊昌齋兩人江産科掛被仰付候間、以来難産ニ罹候者は勿論、産婦療治望之者は病院江申出、教師并右兩人ヨリ可受療治候、此旨向々江不洩様可申渡候事、

辛未三月

知政所

ウイリスの滞鹿中、病院への外来・入院患者は一万五千余名にのぼり、往診患者数数千、医学生徒総数は三百名を数えたという。⁽³⁴⁾ またいずれもイギリス医学を採用した海軍の軍医総監となり著名な医師となつた高木兼寛、実吉安純、加賀美光賢、河村豊州、三田村国忠らをはじめ、その後地域の医療に貢献することとなつた多くの医師たちがウイリスのもとから誕生した。その内薩摩藩領北諸県郡高城(現宮崎県高城町)の伊集院(吉田)元東の履歴を紹介する。

履歴書

宮崎県日向国北諸県郡士族 伊集院元東 天保十一年十一月廿三日 生

一、安政三年二月(十七歳) 鹿兒島典医八木称平二從ヒ洋法内外科

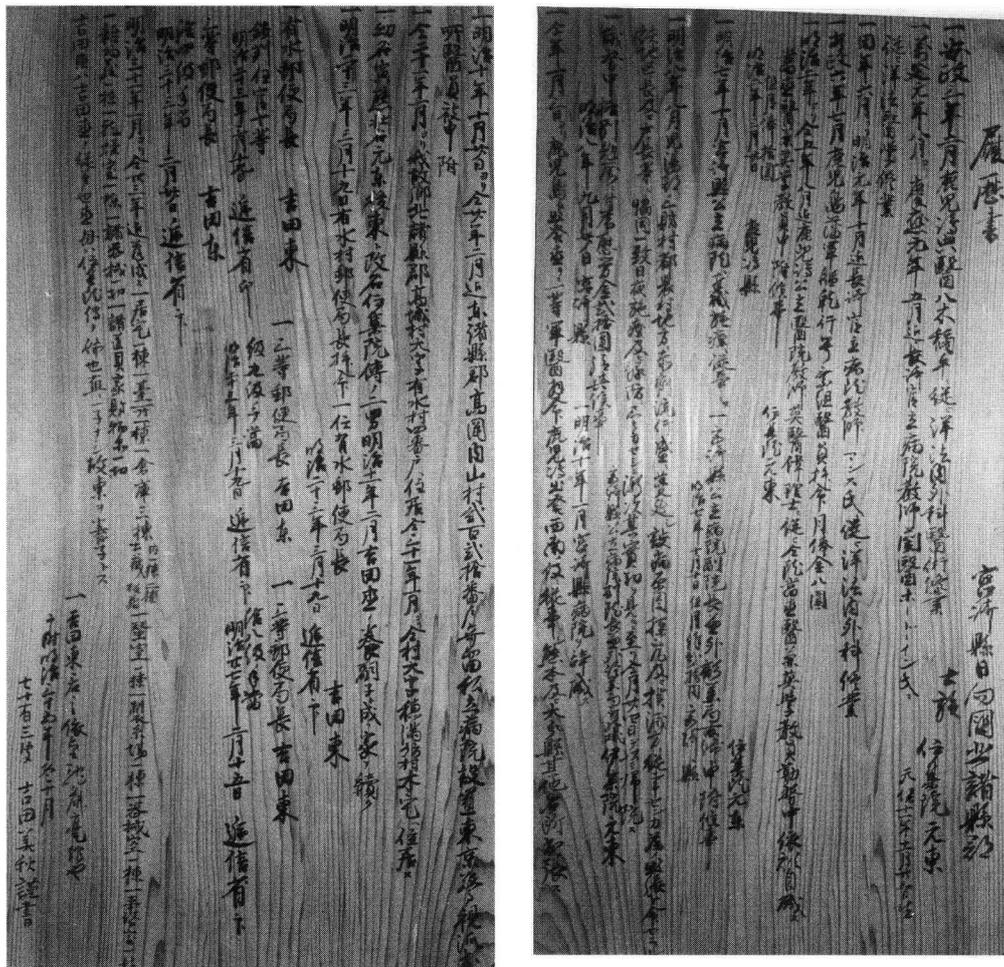


写真5 伊集院元東履歴書 (吉田家蔵, 高城町郷土資料館保管)



写真6 伊集院もと東の写した内科学書 (吉田家蔵, 高城町郷土資料館保管)

医術修業

- 一、万延元年八月ヨリ明治元年五月迄、長崎官立病院教師蘭医ホー
ドーイン氏ニ従ヒ洋法医学修業
- 一、同年六月ヨリ明治元年十月迄、長崎官立病院教師マンス氏ニ従
ヒ洋法内外科修業

- 一、安政六年七月鹿児島藩軍艦乾行号乗組医員拜命、月俸金八円
- 一、明治二年ヨリ同五年八月迄、鹿児島公立医院教師英医偉理士
(ウィリス)ニ従ヒ、同院当直医兼英学教員勤務中依願自職ス

当直医兼英学教員申付候事 伊集院元東

但月俸拾円

明治二年三月廿日 鹿児島県

- 一、明治七年十月宮崎県公立病院奉職施療に従事ス

- 一、 伊集院元東

宮崎県公立病院副院長兼外診薬局取締申付候事

明治七年十月十日 但月俸式十円 宮崎県

- 一、明治八年八月児湯郡三財村、都農村地方ニ赤痢流行、盛ニ蔓延
シ、該病原因探究及ヒ撲滅方ニ従事センカ為出張ヲ命セラレ、該
地区長及ビ戸長等ト協同一致日夜施療及ヒ予防ニ尽力セシニ漸次
其実効ヲ見ルニ至リ、同月二十四日ヲ以テ帰院ス

宮崎県公立病院副院長兼外診薬局被命掛 伊集院元東

- 一、職務中格別勉勵ニ付為慰労金式拾円与候事

明治八年九月廿日 宮崎県

- 一、明治十年一月宮崎県病院ヲ辞職ス

- 一、同年一月三日ヨリ鹿児島県江出発、直チニ一等軍医拜命、鹿児
島出発西南ノ役ニ従事シ熊本及ヒ大分県其他各所出張ス

- 一、明治十年十月廿日ヨリ同廿年二月迄東諸県郡高岡町内山村式百

式拾番戸寄留、私立病院設置、東京警視派出所医員被申付

- 一、同二十一年一月ヨリ我故郷北諸県郡高城村大字有水村四番戸住
居、同三十一年一月ヨリ同村大字穂満坊村本宅へ居住ス

- 一、幼名寅熊、壮名元東、後東ニ改名、伊集院伝の二男、明治十一
年二月吉田直の養嗣子ト成家ヲ続ク

- 一、明治二十三年三月十九日有水村郵便局長拜命

- 一、任有水郵便局長 吉田東

明治二十三年三月十九日 通信省 印

(中略)

- 一、三等郵便局長 吉田東

給四級手当

明治三十三年二月廿日 通信省 印

- 一、明治三十一年一月ヨリ同三十三年迄落成ス 一、居宅一棟 一、

- 台所一棟 一、倉庫三棟 内一棟土蔵、二棟板蔵 一、蚕室一棟

- 一、製糸場一棟 一、器械室一棟 一、事務室一棟 一、雑物蔵

- 一棟 一、乾燥室一棟 一、諸器械一切諸道具家財物品一切

- 一、吉田東ハ吉田直ノ従弟也、直母ハ伊集院伝ノ姉也、直ニ一子ナ

- シ故東ヲ養子トス

- 一、吉田東君之依頼竜蔵毫候也

于時明治三十五年冬十月

七十有三歳 吉田美秋謹書

伊集院元東は、天保十一年(一八四〇)高城の郷士伊集院伝の二男と
して誕生した。幼名を寅熊、長じて元東、後に東と改名している。明治
十一年(一八七八)三十九歳の時従弟で漢方医であった吉田直の養嗣子
となつて吉田家を継いだ。この履歴は、元東が六十三歳の時吉田美秋に
依頼して杉板に墨書させたもので、元東は九年後の明治四十四年一月九
日に七十二歳で没した。

元東は安政三年(一八五六)二月、鹿児島に出て八木称平に入門し、

さらに万延元年（一八六〇）八月には長崎に出、文久二年（一八六二）来日した蘭医ボードインについて長崎精得館で医学を修業した。またボードインの後任で蘭医マンズフェルトにも医学を授けられている。その他、履歴に書かれてはいないが、ボードイン以前にボンベにも師事した可能性がある。

長崎での医学修業を終えた元東は、明治二年に鹿児島に帰り、ウイリスの医学校で五年の間当直医兼英学教員をつとめていた。そうすると長崎では、医学の他に英学も修業していたと思われる。元東は医学校に約五年間奉職した後、明治七年十月からは宮崎県公立病院に移り、西南の役では薩軍に身を投じた。そして戦後は一貫して郷里北諸県郡に居住し、病院を開業し、警察医として、あるいは郵便局を設立して郷土の医療や郵便業務に貢献した。また明治三十三年には製糸場を設立して民業の発展につくしている。

この伊集院元東の履歴から、この時代に生きた薩摩の医師の典型的な一生がみとれるように思う。郷里を出て鹿児島に遊学し、さらに長崎に出て蘭方医学を修める一方で英学を修業した。さらに、鹿児島の医学校ではウイリスに師事し、英国の臨床医学を身につけて医師として独立する。ただし、ここで西南戦争が勃発した。鹿児島多くの医師たちは、薩軍に参加し、生きて郷里に戻った者は、元東と同じように市井の医師としてその後半生を暮らした。しかし、そのような医師たちによつてしだいに近代医学が鹿児島諸地域に普及していったのである。

おわりに

鹿児島の蘭学は、当時の博物学の影響と島津重豪の蘭学趣味から、藩はオランダ通詞を招聘して、はじめて蘭学が薩摩の地にもたらされた。

斉彬の父斉興の時代には、蘭方医の前田杏斎や松木雲徳が君側に仕えて

いる。また自費で江戸に遊学して蘭学を学ぶ黒江綱介等がおり、綱介の父循介もまた蘭方医であったから、この頃には薩摩藩の諸地域に蘭学を学ぶ者たちがあらわれてきた。さらに限られてはいただろうが種痘もこなわれている。

しかし、何といっても蘭学が重用され急速に普及していったのは、斉彬の時代であり、それは藩が推進した集成館事業の周辺に顕著であった。斉彬はまた藩士の藩外遊学を熱心にすすめ、安政三年二月には八木元悦の二人賄料の遊学費を三人賄料に増額、四月には一般の遊学費も三人賄料となったが、遊学の希望者は少なかったといわれる。それは多くの場合、藩士たちの経済的な問題によるものであった。⁽³⁵⁾したがって、大坂や江戸といった遠隔の地への遊学は稀であったといえよう。むしろ薩摩藩では優秀な蘭学者を藩士に採用したり、蘭学者たちとの人脈を活用するという傾向が強かった。

ただし、この頃になると藩士の長崎出張や遊学が目みえて多くなってくる。薩摩藩では、最も多いのが長崎である。中でも安政二年に設置された長崎海軍伝習所には二十八名もの藩士が入所している。このようにして蘭学はしだいに日用のものとなっていった。

特に薩英戦争後においては開成所が設けられる等、一層その普及がはかられたが、しだいに時代を反映して洋学の中味は蘭学から英学へと移行し、後期の開成所においては、もっぱら英学が主流となった。また医学の面では、地域における蘭方医療の普及について、今回一、二の事例が見出せたが、本格的に鹿児島が西洋医学の恩恵を受けるのは、英医ウイリスの招聘まで待たなければならなかった。例えば、ウイリスの弟子として沖永良部島から入門した操担勁、沖揖賢、鎌田宗円の三人と大島の鳥丸一郎が判明している。この時奄美にも西洋医師の門人があらわれるのである。

鹿児島における蘭学を受容とその変遷は、他の地域に比べかなり特殊

なものであったかも知れない。一方、最後の薩摩藩主島津忠義の父久光の『玉里島津家史料』明治元年に、藩医である漢方医柳田友広の漢洋医師に関する上書が掲載されている。⁽³⁶⁾ 柳田はしきりに洋医が尊重され漢方医流が退けられている状況を嘆き、「漢方医ノ才能アル者」の採用を訴えている。この頃、医学の面においては漢方医の目にも洋医の抬頭がはつきりと感じられるようになったものと思われる。

註

- (1) 『長崎海軍伝習所の日々』ファン・カッテンダイーケ(水田信利訳 平凡社東洋文庫 一九六四年)、『日本滞在看聞記』ボンペ(沼田次郎・荒瀬進訳 雄松堂新異国叢書 一九六八年)。
 - (2) 『江戸参府紀行』シーボルト(斎藤信訳 平凡社東洋文庫 一九六七年)。
 - (3) 『薩摩の洋学』芳即正(南方新社)『薩摩と西欧文明』二〇〇〇年。
 - (4) 同右。
 - (5) 『斉彬公史料』第三卷 一二四文書 鹿児島県歴史資料センター(鹿児島県一九八三年)。
 - (6) 『斉彬公史料』第四卷「島津斉彬ローマ日記」鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島県 一九八四年)。
 - (7) 『西征紀行』箕作阮甫 木村岩治編(津山洋学資料館友の会 一九九一年)。
 - (8) 『斉彬公史料』第四卷「豎山利武公用控」(前掲)。
 - (9) 『在村の蘭学』田崎哲郎(名著出版 一九八五年)。
 - (10) 『寺島宗則』犬塚孝明(吉川弘文館 一九九〇年)。
 - (11) 『石河確太郎と薩摩藩』芳即正(『尚古集成館紀要』七号 一九九四年)。
 - (12) 『長崎洋学史』下 古賀十二郎(長崎文献社 一九六七年)。
 - (13) 『長崎海軍伝習所の日々』ファン・カッテンダイーケ(前掲)。
 - (14) 『贈正五位中原猶介事蹟稿』中原尚徳・中原尚臣(一九二八年)。
 - (15) 『斉彬公史料』第一卷 一〇九文書 鹿児島県歴史資料センター(鹿児島県一九八一年)。
 - (16) 『斉彬公史料』第一卷 一一一文書(右同)。
 - (17) 『斉彬公史料』第一卷 一二一文書(右同)。
 - (18) 『種子島家譜』第五卷 鮫島宗美(一九六二年)。
 - (19) 『種痘の普及に尽力した蘭学者黒江綱介』(『広報たかおか』九月号・十月号 高岡町 二〇〇〇年)。
 - (20) 「黒江家文書」にみえるが、現在今城氏によって整理中であり、発刊が待たれる。
 - (21) 同右。
 - (22) 『薩摩海軍史』中巻 公爵島津家編纂所(原書房 一九六八年)。
 - (23) 同右。
 - (24) 「幕末の薩摩藩立開成所に関する新史料」大久保利謙編(『大久保利謙著作集』第五巻 吉川弘文館 一九八六年)。
 - (25) 『玉里島津家史料』巻五 一五九八文書 鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島県 一九九六年)。
 - (26) 『明治維新人名辞典』日本歴史学会(吉川弘文館 一九八一年)。
 - (27) 『忠義公史料』第七巻「忠義公年譜・年表」鹿児島県歴史資料センター(鹿児島県 一九七九年)。
 - (28) 「上野景範履歴」翻刻編集「門田明・芳即正・久木田美枝子・橋田晋作・福井迪子(『鹿児島県立短期大学研究所研究年報』第十一号 一九八二年)。
 - (29) 同右。
 - (30) 『近代西欧文明と鹿児島』犬塚孝明(『薩摩と西欧文明』南方新社 二〇〇〇年)。
 - (31) 『鹿児島県史』第四巻(鹿児島県 一九四三年)。
 - (32) 「ウィリアム・ウィリスの門下生たち」森重孝(『鹿児島大学医学雑誌』第四十七巻補冊一 一九九五年)。
 - (33) 『忠義公史料』第七巻 五〇文書(前掲)。
 - (34) 「ウィリアム・ウィリスの門下生たち」森重孝(前掲)。
 - (35) 『薩摩の洋学』芳即正(前掲)。
 - (36) 『玉里島津家史料』巻五 一七九三文書(前掲)。
- ※その他拙稿「集成館事業を支えた人々」(『島津斉彬の挑戦』春苑堂 二〇〇二年)による。
- (二〇〇三年一月二三日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了)
- (尚古集成館、国立歴史民俗博物館共同研究員)

The Acceptance of Rangaku and Changes in the Satsuma Feudal Domain

TAMURA Shozo

This paper examines the situation surrounding the acceptance of Rangaku by the Satsuma feudal domain and the changes it underwent from the perspective of the Shuseikan Project, the site of the introduction of modern science and technology by the Satsuma feudal domain, which stood at the vanguard of modernization in Japan.

Rangaku in the Satsuma feudal domain was started by an interest in natural history during the Early Modern Period and the interest in Rangaku by Shimazu Shigehide, and gradually spread within the domain through invitations to Dutch translators and the employment of physicians who practiced Western medicine. Rangaku became important and spread rapidly during the time of Shimazu Nariakira when it became prominent in connection with the Shuseikan Project undertaken with great vigor by the domain. However, the acquisition of Rangaku learning by the domain's retainers was less than that of retainers from other regions who went to Edo or Osaka to study, partly because of the distance between the domain and these centers of activity as well as economic difficulties. Instead, outstanding Rangaku scholars from the huge urban centers of Osaka and Edo were employed by retainers who made effective use of the personal connections they formed with these Rangaku scholars. Still, travel to Nagasaki to study there was the exception.

The spread of Rangaku within the Satsuma feudal domain was driven by the domain's leadership. Therefore, viewed from the standpoint of regional Rangaku differences can be seen in the objectives, contents, scale and circumstances of its adoption by the Satsuma domain and other feudal domains during the same period. And it is not true that the benefits of this dissemination of Rangaku did not extend to every region within the domain. During the research undertaken for this paper it was possible to confirm examples of vaccinations, which in itself affirms the existence of regional Rangaku. This confirmation is found in records showing that the vaccination techniques of Maeda Kyosai, who received instruction in vaccination by the Dutch doctor Otto Mohnike in Nagasaki, was passed on to physicians working in Takaoka and Tanegashima, who then carried out vaccinations themselves.

Immediately after the Satsuma-Anglo War the Satsuma domain established the Kaiseijo academy for the purpose of acquiring Western studies that would accelerate modernization within the domain. At first, Rangaku was given precedence at the academy, but factors such as world trends and relations between the Satsuma domain and Britain after the Satsuma-Anglo War saw British studies steadily gain more and more importance. Then, the invitation issued by Satsuma to the British doctor William Willis in 1869 to establish a hospital and

medical school that accompanied the adoption by the Japanese state of German medicine resulted in the rapid adoption of British medicine. It was only after this that the region began to receive the full benefits of Western medicine.